『ヒメゴト』

作・瀬多海人

■登場人物

ユキナ（16）高校生

キリ（16）高校生

マナミ（16）高校生

○バスの車内・夕
　走行中のバスの中。

ユキナ「はぁ……（ため息）」
キリ「ユキナってば、まーたタメ息なんかついちゃって。今日何度目？」
ユキナ「だって、キリー、マジマ君が……」
キリ「はいはい、マジマ君が校門の前で、ユカち達と楽しそうに話してたって、言うんだろ？」
ユキナ「それな！」
キリ「ただ朝の挨拶してただけだろ。そんなことでいちいち落ち込んでたら、生きてけないよ？」
ユキナ「絶対違う！　あの〝おはよう〟は私に対しての〝おはよう〟と響きっていうか、優しさっていうか……とにかく違う！」
キリ「それも朝から何度も聞いた。ていうか、聞かされた。ね、マナミ？」
マナミ「……う、うん、そうだね」
キリ「ほら、マナミだって、同じ事の繰り返しで、呆れてぐったりしてる」
ユキナ「えーっ、そうなの？　あたし、ウザい？」
キリ「マナミ、ウザいならウザいってハッキリ言っていいんだよ？」
マナミ「そ、そんなことないよ！」
キリ「私はユキナとは保育園の頃からの腐れ縁だからもう慣れてるけど、マナミは高校入ってから、一緒のクラスになったばっかだし……」
ユキナ「あたしはキリはもちろんマナミも親友だと思ってるよ？　だから言いたいことがあったら、言ってよ」

マナミ「親友？」
ユキナ「だって、親友だと思ってなきゃ、ふたりに恋愛相談なんかしないよ」
マナミ「親友って言ってくれるのは嬉しいけど、恋愛……相談だったんだ」
キリ「相談っていうか、ユキナが一方的に話してるだけだよね」
ユキナ「……うっ。……わかった、もう黙る。はい、今から沈黙！」

バスが停留所で止まる。
何人かの学生が降りていく。

ユキナ「はぁ……やっぱダメ。黙ってると、どんどん不安になってく」
マナミ「重症、だね。でも、ちょっとそういうの憧れるな」
ユキナ「〝初恋〟って苦しいけど……いいよね」
キリ「は？」
ユキナ「は？　って何？」
キリ「初恋？　だってキミ、保育園の時、ひとつ上のマナブ君が初恋だって！　それに少三の時には、隣のクラスのミヤセにバレンタインのチョコあげたろ？」
ユキナ「ちょ、声おっきい」
キリ「……ヤバっ。……（他の乗客に向かって、小声で）す、すみません」
ユキナ「あんなの子どもの頃の話でしょ。今あたしたちは高校生。わかる？　……やっぱり、真剣なお付き合いっていうか、そういうのを意識しちゃう……ワケよ」
キリ「……ぷっ」
ユキナ「あっ、笑った！」

マナミ「悪いよ、キリちゃん。ユキナちゃん
は真剣なんだから」
ユキナ「キリはいいよね！　恋愛の悩みとは
無縁で！」
キリ「（少しムッとして）……っ！」
マナミ「ユキナちゃんも言い過ぎ」
ユキナ「だって本当じゃん、キリは昔っから
ボーイッシュで女の子には人気あったけど、
こんな苦しい恋愛したこと、ないでしょ」
キリ「（ボソッと）……あるよ」
ユキナ「えっ……いつ？」
キリ「いいだろ、いつでも。あたしはユキナ
みたいにベラベラ他人に話したりしないん
だよ」
ユキナ「はぁ!?」
マナミ「はい、そこでオシマイ！　もう……
ふたりともケンカしないでよ」
キリ「ケンカなんか、べつに……」
ユキナ「……ごめん」
キリ「え？」
ユキナ「つい……キリ相手だと、言い過ぎち
ゃうけど……今のはあたしが悪い。だから
ゴメン」
キリ「……そういうとこ」
ユキナ「何？」
キリ「昔から、そういう素直なとこが好きだ
って言ってんの。おらおら」
ユキナ「こ、こらっ、ヘッドロック痛いって
！　ギブ！　ギブアップ！」
マナミ「仲、いいね、ふたりとも」

バスが停留所で止まる。

マナミ「あ……ほら、ユキナちゃん、次。話

に夢中になって、また乗り過ごさないようにね」
ユキナ「はーい。マナミってば、お母さんみたい」
マナミ「そ、そうかな……？」
ユキナ「うん、同い年とは思えないくらい落ち着いてるし、あたしたちのこと、見守ってくれてる感っていうかさ」
キリ「それはあるね。まだ付き合いは短いのに、マナミには何でも話せる」
ユキナ「でしょ？　だから、あたしの初恋についても……はぁ……」
キリ「またため息」
ユキナ「ため息も出るよ。夏までにもう少し仲良くなりたいのに……今のままじゃ、ただのクラスメイトのひとりで終わりそう」
キリ「なら、さっさと告白しなさい」
ユキナ「こ、こここ……告白？」
キリ「ユキナ、いつものキミらしくないな。今までなら悩むよりも行動だったろ？」
ユキナ「……うん。だけど」
キリ「だけど、じゃないの。私の好きなユキナはそんな言い訳しないよ？」

バスが停留所で止まる。

ユキナ「ね……キリ。背中……押してくれる？」
キリ「うん。（とんとユキナの背中を押して）……明日行っといで。キミはとっても魅力的なんだから、自信をもって」
ユキナ「明日？　き、急すぎないかな……？」
キリ「善は急げ。ほら、もひとつついでに、背中押してあげるから！」

ユキナ「……うん。ね、いつものあたしなら、
悩むより行動してるって言ったでしょ？
でも、それはいつも……キリが背中押して
くれてたからだよ！」

駆け出すようにバスを降りていくユキナ。
バスが発車する。
車内に残されたキリとマナミ。

マナミ「あれもある意味、告白、かな」
キリ「え？　あ、ああ……でもさ、私が背中
を押さなくてもユキナはきっと……」
マナミ「キリちゃんは告白することないの？」
キリ「だって私は……（少しおどけたように）
ほら、恋愛には無縁ですから？」
マナミ「苦しい恋愛……したんでしょ？　う
うん、今もしてるのかな」
キリ「何を言ってるのかわかんないよ」
マナミ「……そっか。なんかそんな気がした
だけ」
キリ「あの……さ……」
マナミ「えっ、ち、ちょっとどうして泣いて
るの。私、余計なこと言っちゃった？」
キリ「ううん……いいんだ。……ね、マナミ、
ちょっとだけ胸……貸してくれるかな」
マナミ「……う、うん、今日は特別サービス。
降りる場所が来るまでずっと……いいよ」
キリ「……ありがと」

マナミの胸で泣き崩れるキリ。

キリ「保育園で初めて会った時から……ユキ
ナが私の初恋……だったんだ。でも言葉に
してしまったら、壊れてしまうものも……

あるから……」
マナミ「そっか……」
キリ「女の子が女の子に恋をするなんて、変、だよね……？」
マナミ「ううん、そんなこと。でも……苦しいよね」
キリ「……苦しいよ？　苦しいけど、ユキナのそばにいるためには、この苦しみに耐えなきゃいけないんだよ……今までも、そしてこれからも……」

遠ざかってゆくバスの音。

（了）